

ダイニングテーブルに置いたパソコンを睨みつけているうちに、夜が明け始めてきたようだった。タバコを吸うため、椅子に載せていた右足を動かそうとしたが痺れて動かない。体を前に倒すと腰に痛みが走った。

俺は今、二月中旬だという時に四月売りの本の編集をやっていて、それも結構な正念場を迎えていた。よたよたと換気扇の下まできて、タバコに火をつけた。これまで何度も禁煙を試みて何度も失敗してきた。今回は女房からの命令で禁煙すると約束したが、編集作業に入るとタバコを我慢できなくなる。家族がそれぞれの部屋で寝ているときに隠れて吸っている。換気扇の回る音が響くので誰か起きてきはしないかと、用心しながら大きく吸い込んだ。タバコはシバシバと音を立てて先端を赤くした。

短くなったタバコを水道水で消し、ティッシュで何度も包んでゴミ箱に捨てるも、気になつて、もう一度ゴミ箱のペダルを踏んで開け、ティッシュを奥の方に押し込んだ。指さきに生ごみの感触があり、手を慌てて引き抜いた。水道で手を洗っていると、ことごと、音がした。心臓が跳ね上がり、音のした方をみると娘がそこに立っていた。

「どうした？」

声を潜めて訊いた。返事はない。娘はGAPで買った赤いミッキーのパジャマを着ていた。寝ぼけているようで、視線は宙をさまよっている。こっちも黙っていると、娘は廊下の突き当りのトイレに入ってしまった。

壁の時計をみると五時四十分だった。そろそろダイニングテーブルの上を片付けておかないと、起きてきた女房に見咎められる。それでまた朝から小言を聞く羽目になるのはごめんなので、散らばっていた紙を纏めパソコンを閉じた。

六時ちょうどに炊飯器から炊き上がり知らせるアラームが鳴った。と、廊下からスリッパの音がして女房が入ってきた。俺と目が合うと、さっと視線をダイニングテーブルに移した。

「おはよう」俺は女房に話しかける。

ゴボゴボと吸い込まれるような音を立てて、コーヒーマーカーが保温に変わる。二つのカップにコーヒーを注ぎ、ひとつを妻の席に置く。

「何か臭わない？」

俺はドキリとする。いやこれは鎌をかけているのだ。

「そうか？ ずっといると分からんな」と答えた。

「あなたの体臭よ。また美咲が嫌がるわよ」

女房はそう言って、ベランダ側のサッシを開けた。レースのカーテンが巻き上がり、朝の

冷たい空気が俺のはだしの足元を通り抜けていった。

女房は子どもたちの朝ごはん用にベーコンエッグとグリーンサラダを作り、自分の昼ご飯用の弁当を詰めるとシャワーを浴びに行った。

七時になると俺は子どもたちを起こしにそれぞれの部屋を叩く。九歳の娘の美咲は「起きてる」と不機嫌そうな声を返してきた。七歳の息子の颯太はノックだけでは起きてこない。部屋に入ると息子は布団を頭から被って丸まって寝ている。こいつが今度小学二年生になるとは……。すっかり幼児っぽさが抜けた息子の姿をみて思う。赤ちゃんのころから凄く速さで大きくなっていると改めて驚く。こっちはこの先ジジイになって死ぬだけだということに。

俺はキッチンに戻って子どもたちのためにオーブントースターで食パンを二枚焼く。今日の食パンは、最近はやりの食パン専門店が買ってきたものだ。勤めを辞めて自宅で仕事をするようになったことで朝飯を食べる習慣ができた。トースターから漂ってくる匂いにこのパンは美味しいに違いないと確信する。

焼きあがった食パンはきめが細かく弾力があつた。娘にはバターとイチゴジャムを塗ってやり、息子はチョコレート風味のヌテラ一択だ。

息子が口のまわりにチョコをべったりつけて食パンを齧っているのをみていると、また、しんみりしてしまった。じつと息子を見ていたら、黙々とサラダを食べていた娘と目が合った。おやじを鬱陶しく感じる年ごろなのか、さっと顔色が変わったかと思うと、「食べたいの！」と娘からきつい調子で言われてしまった。

子どもたちが続いて、女房が家を出て行った。それまで家族が息づいていた気配というのがこの時間帯には確かにある。食べ物の匂いとかテーブルに置かれたままの食器だけではなく、空気の振動、生き物から発せられる目に見えない微粒子が飛び交っていると思う。俺はまだこの時間帯に馴染めない。一度、この気配が消えるまで仕事に向かえないのだ。

子どもたちの食べた食器をシンクに運び、軽く汚れを濯いでから食洗器に入れる。ダイニングテーブルを布巾で拭き、ダイソンのコードレス掃除機で床の掃除をする。そのまま廊下や玄関、トイレの床も掃除機を持って回る。俺たちの寝室と子ども部屋はあととする。

女房がシャワーから出たときに回した洗濯機が洗い終わったところだろう。大きな全自動洗濯機の中にはネットに分別された衣類が数袋入っている。ネットの中身をだして洗濯かごに移していく。今日は普通ゴミの日だから洗濯作業はいったん中止して、洗面所やトイレのゴミも集めて、マンション一階のゴミ集積所に行つた。

ベランダのガラスサッシが開けっぱなしだった。朝、女房が開けたまま閉め忘れていた。寒く感じなかったのは、朝のニュースで三月下旬並みの気温だと言っていたから二十℃くらいあったせいかななどと考えながら、洗濯かごを持ってベランダに出る。マンション十階のここからだと思境の山並みを突き抜けるように造られた切通しの国道がはつきりと見える。春には両側に植えられた桜並木が薄桃色のトンネルとなり、花見の車で連日大渋滞となる。

このマンションを買う決め手になったのは見学にきた日が桜のトンネルになっていたときだったからだ。

洗濯かごを下に置いたとき、ベランダの隅にあった水槽と俺が使っていた灰皿が目に入った。ここに住むことが決まったとき、部屋でタバコを吸うとクロスがヤニで変色するのでベランダで吸うことを約束させられた。それなら、賃貸のアパートで使っていた家具を買い替える予定だったので、ベランダで使う灰皿もしゃれた物を買って欲しいと頼んだ。女房が探してきたのは一九五〇年代のイギリスから買い付けたという真鍮製のスタンド灰皿だった。皿には鍛冶職人が鉄を打っているようなレリーフが施されている。値段は三万数千円だった。俺はベランダに専用の椅子を置き、ゆっくりとタバコをふかすのが気に入っていた。

それが数年前にマンションの規約が変わり、ベランダでタバコを吸うことを禁止された。夏場など窓を開けるとタバコの臭いが部屋に入ってくると苦情が相次いだせいだった。以来、この灰皿を使わなくなった。

洗濯かごに手をつこんでは、息子の小さなパンツ、娘のかわいいパンツ、女房の大人なパンツ、そして俺のボクサーパンツと心の中で唱えながらパラソルハンガーにかけていった。バスタオルや子どもたちの服を干すと物干し竿は満載になった。残る寝室と子ども部屋の掃除機をかけ終わると俺の仕事はおしまいだ。

今日は午後から出版社に打ち合わせに行く用事がある。四十半ばになると徹夜が堪えるようになった。仮眠をとりたいところだがその時間はない。若いときには二日、三日寝ずに仕事をしたというのに。シャワーを浴びて髭を剃って家を出た。

マンションのエントランスを出ると、主婦たちがひとかたまりになって話をしていた。俺は曜日を確認した。女房が注文している生協の宅配は明日のはずだった。同じ日に共同購入する生協の配達もあるが、あの主婦たちの集まりはそれではない。見知った顔はなかったが、俺は会釈して前を通った。

打ち合わせが終わり出版社を出ると雨が降っていた。今日の天気予報では雨とは言ってなかったはずだ。俺は出たついでに回ろうと思っていたところへは行かず、急いで家に戻ることにした。駅に着くとこちらにも結構な雨降りで傘がなくては歩けない状態だった。コンビニに入ってビニール傘を買った。マンションに向かう道には下校途中の小学生の姿がぼつぼつ見受けられた。うちの子どもたちは学童保育に入っているので帰りはもっと遅い。

家に戻ると一目散にベランダに走った。外側に干していたバスタオルはすっかり雨にかかって濡れていた。内側に干していたものも湿っている。俺的にはこのまま干しておいて再び乾くのを待てばいいのだが、女房は雨に濡れたら洗いなおさないと気が済まない質なので、全部取り込んで、もう一度濯ぎ洗いをしなくてはならない。

俺が会社を辞めてフリーランスになると決めたとき、最初、女房は難色を示した。女房もフルタイムで仕事をしているので、一時的に俺の収入が減っても家計は回るだろうというのが俺の考えだったが、女房は俺の独立が失敗して無収入になったらどうするのだと。それは想定していたことだった。独立後に収入が増えていかなければ必ず再就職するというこ

とと、俺が家事を全部すると言うと、妻はあっさり承諾した。これまでほとんどひとりやってきた家事を俺にスライドすることが出来るメリットが女房にとってそんなに大きかったのかと内心驚いた。

ただ、料理は生まれてこのかた、包丁も持ったことがないので無理だと思おうと思ったら、女房はまずい料理は食いたくないから料理はするが片付けはしないということ合意した。いまある食洗器やダイソンのコードレス掃除機も家事効率がよくなるからと女房が欲しがったので買ったのだ。洗濯機も確か、ドラム式で乾燥機付きのものが欲しいと言っていたはずだった。俺が家事をやりだしたところに雨にあたった洗濯物をそのまま干していたら文句を言われた。その時、だったら乾燥機をついたドラム式の洗濯機を買おうと言いついたのだ。女房はそれを一蹴した。俺はほとんど家において仕事をしているのだから、雨が降り出したら洗濯物をとりこめるだろうというのが理由だ。

夜七時を過ぎた頃、女房が帰ってきた。晩飯用のご飯は夕方三合しかけて炊き上がっているがどうも落ち着かない。というのも、最近料理のこともやっておくように指示されるが増えたからだ。鍋に水をはって昆布を入れておくとか、じゃがいもの皮を剥いておくとかそういう仕事だ。俺はそれをよく忘れる。

ダイニングキッチンに入ってきた女房から買い物袋を受け取ろうと立ち上がると、やけに機嫌のいい顔して俺を見てくる。

「何？」

俺は無然として訊ねる。

「エレベーターで七階の奥さんと一緒になったのよ。そしたらさあ、『お宅のご主人ヤマトの宅急便でお勤め？』っていう訳。わたしがきよとんとしていると、彼女の息子さんそう言ったって。でも奥さんは『颯太君パパはお昼間お家にいるから違うよ』って言ったんだって。なんで、わたしも『そうですね』って言っというわよ」

言い終わると女房は声をあげて笑った。

「何で笑う？」

俺は益々不愉快になる。

「だって、あなたみたいなぶつきらぼうで無精髭の坊主頭の男が宅配便を持って玄関に立ってられたら強盗と間違われるわよ」

ひと続きになったリビングの方でテレビを観ていた子どもたちが、何事かと俺たちの方を見ている。俺は息子に訊いた。

「お前、何か言っただろう？」と言うと、

「夢でもみたんじゃない？」と返してきた。

「じゃ、俺の仕事のこと、わかってんのか？」と訊き返した。すると、

「知ってる。本屋さんでしょ」と答えた。

まあ惜しいところだと、今度は娘に訊いた。

「美咲、俺の仕事はなんだ？」

娘は「知らなーい」と背を向けてテレビのアニメに戻っていった。やはり娘は俺に何か気に食わないことがあるんだろう。俺は女房の方に向き直った。女房はジャケットだけ脱いで、とつくに夕食の支度にとりかかっていた。

徹夜したせいとか、夕食に飲んだ缶ビール一本でくらくらになった。今夜は仕事をあきらめて早めにベッドに入った。

女房が風呂に入って寝室に戻ってきた。いつも朝にシャワーをするのに珍しいと思っていると、いきなり俺の上に乗ってきた。着ているパジャマがしに熱と湿気が伝わってくる。眠気と闘いながら、俺は女房の乳房をパジャマの上から揉む。事が終わってから、欲情もしていないのにセックスをさせられてしまったことについて考えていると、頭が冴えてきた。隣では真っ裸の女房が寝息をたてている。俺はまた無性にタバコが吸いたくなった。

パジャマを着ると静かにベッドを抜け出した。キッチンの壁掛け時計は三時を指していた。ダイニングテーブルの上にノートパソコンを開いて電源ボタンを押す。

暗い部屋にパソコンの画面が白く光る。パソコンが立ち上がるあいだ、換気扇の方を何度も見ていた。タバコのことを追い出そうと頭を振った。いや、いつそのこと、ベランダのあの灰皿のところ吸ってみようと思った。意を決してベランダに出た。タバコにライターを近づけたとき、急に、ここで今タバコを吸ってしまうと、すべてが無に帰してしまう気がした。禁煙ならとつくに破っているのに、自分でも変だと思いがタバコを箱に戻した。

桜のトンネルが全盛期を迎えている。俺は洗濯かごを持ってベランダに出ると思いつきり伸びをして肺を膨らませた。ベランダの隅にはスタンド付きの灰皿しかない。水槽は四月になってからリビングのテレビの隣に鎮座している。子どもたちが「学童」で奨励しているビオトープを今年も作ったからだ。昨日は池の底から掬ってきた泥土からおたまじゃくしが孵ったと騒いでいた。

洗濯物を干し終え、部屋に入ると子どもたちが水槽を覗いていた。俺も近づいて中を覗く。水の中を十数匹のおたまじゃくしもぞもぞと動いている。おたまじゃくしといえば、子どもたちの疑問に思ったことがあった。川の近くでもない雑草が生え放題の空き地などで、雨が降った時だけ水溜りになるところがある。そんなところにおたまじゃくしが泳いでいるのを見たときだった。いっとうやってそこに卵を産み付けたのか。もし雨がぜんぜん降らなくて、水溜りが干上がったらどうなったのか。あのとき、親父やおふくろに訊いてもちゃんと答えてくれなかった。

ふたつ頭を並べて水槽に見入っている子どもに向かつて、

「餌はかつお節がいらしいぜ」と言ってやった。

「去年、餌あげなくてもカエルになったから、あげなくても大丈夫じゃない？」

という答えが娘から返ってきた。去年、やせ細って最後にはみんな死んでしまったことを

覚えているだろうに。

死ぬと言えど娘が幼稚園のときに息子と神妙な面持ちでままごとをしているときのことを思い出した。俺は勤め人だったところで、珍しく休みの午後を家で過ごしていた。木でできた赤い傘で白い斑点のベニテングダケの模型を蓋つきのクッキーの缶の中に入れていた缶の中に白いハンカチを敷きその上に横に寝かすようにしている。ふたりの口が微かに動いているので、よく聞いてみると、「アーメン、アーメン」と唱えているのだ。

そのとき、娘が、「きのこのお葬式やってんの」と嬉しそうに俺に言った。

日曜日でたつぷり睡眠を取った女房がリビングに入ってきた。息子は女房に気づくや、立ち上がって部屋の中を走りまわった。

「何だよ。走るなよ」

俺が息子を注意すると、

「モールに行くからさあ、音楽聴くならいまのうちだよ」と言う。

女房に流行りのスニーカーを買ってもらうらしい。

黙って聞いておれば何だ、その物言いはと、俺は息子の言葉に苛ついていた。心得違いも甚だしい。主導権が誰にあるのか思い知らせないといけない。そう口にしようにとした矢先、こちらを射るような視線に気づく。そちらを振り向くと、娘が怒りのこもった目で俺を見ていた。口の中で言おうとしていた言葉が溶けて消えた。

女房から三人で夕食も済ませてくるから、あんたは好きにしていっていいと言われた。これが主夫の休日ってやつかと、ありがたく昔の仕事仲間メールアドレスをして夕方から飲みに行く約束を取りつけた。

かかりつきりだった仕事を納めたあとの、このつかの間の解放感が心地よかった。仕事はあったらあったで、なければないで焦りと不安の両輪で止まらない状態のまま二年近くの時間を費やしてきた。会社を辞めてフリーランスになってよかったとか、辞めなければよかったとかいう総括はしないつもりだ。そして家庭と仕事をどっちとかいうYESかNO式の答えも持ち合わせていない。今は誰もいない家のリビングにいて、ソファに寝そべっている楽しさを享受するのみだ。

しばらく帰らないと思っていたのに俺が横になっっているソファの前に娘と息子がいる。テレビもゲームもせず床に敷いたラグの上に座っていた。俺は寝ていると思われているのか、ふたりともこちらを窺う様子もなかった。何をしているのか知りたいのでこちらも狸寝入りを決め込んでおく。

「男としては弱すぎ」

と息子。

「真面目に生きてたってしょうがないぜ」

と娘。

「うん」

と息子。

いったい、何の話をしてるんだと俺は目を開けかける。

「何にもなれないで、ただ生きていくんだよ」

と言って、娘が息子を脅している。

強烈なひと言だなど、我が娘の言葉のセンスに関心していると、娘がいきなり俺の方を見て、

「うるさい！」

と言う。

「俺は何も言ってないぞ」

とおもうとするが言葉がでない。それが親に向かって言う言葉かと、今日くらいは叱っておこうと思い、立ち上がるうとするも体が全然動かない。目を開けようとするが、瞼は糊付けされたようにびったりくっついたままだ。

薄暗くなったりビンゴで目を覚ました。その瞬間、娘も息子もいなくなった。

昔の仕事仲間とは、かつての会社近くの大衆居酒屋で落ち合うことになっていた。油で汚れた藍染め風の暖簾には白で『おかやん』と染め抜かれている。その暖簾を軽くめくって中に入ると、厨房で串焼きを返している大将と目が合った。

「おお、もーやんじゃねえか。やぐつちゃん、来てるよ」

顎で連れのいる場所を指した。

大将にやぐつちゃんと呼ばれた昔の仕事仲間は俺を見ると、ビールグラスを掲げてみせた。

「久しぶりだな」

俺は隣の席の人に体がぶつからないように慎重にテーブルの間を通り抜けながら椅子に座った。

「もーやんって、久々に聞きましたよ。浅野さんのどこをとって、もーやんって呼ばれたんですでしたっけ」

大将によると昔のドラマの主人公と俺が似てるからという話だった。

「思い出した。『どてらいやつ』だ。西郷輝彦が演じた」

観たこともないドラマの主人公のことなど、どうでもいいと店員に手を挙げて、熱燗を注文した。

「おい、矢口、いま誰の担当？」

運ばれてきたガラスの徳利から手酌で酒を注ぎながら訊いた。

「僕はMさんになりました」

Mさんは俺の担当だった。フリーになったいまでもMさんとの交流はある。

「おお、だったら訊くがMさんの装丁、なんで変えたんだ。これまでの装丁はMさんも気に入ってたはずだぞ。お前が変えたのか？」

矢口は口に入れたばかりのビールを吹き出しそうになり、手で覆っている。

「ちっ、違いますよ。誰があんな少女趣味な装丁にしますか。いつものあのですよ。俺たちの作る本をラノベの見てくれにしてジャケ買いさせたいんですよ」

見当はついていたが、やはりそういうことだったのかと思った。

「Mさんは反対しなかったのか？」

「そうっすねえ、あの人の根回しが上手くて、何も言えなかったみたいです。納得はしてないと思いますがこのご時世売れる本がものをいいますから」

俺が会社を辞める決心をしたのはまさにそこだった。企画を出しても売れるか売れないかで決められた。一番我慢ならなかったのは、いままでもなら扱わなかった作家でも話題性だけで本を出したりすることだった。そんなことを考えていると、

「何黙り込んでるんですか？ 浅野さんの出す本、どれもこれもすごいっすよね」

矢口から俺のかかわった本の評判がすこぶるいいとお世辞を言われる。

いい本と売れる本はまた別の話だ。俺は本が売れようが売れまいが仕事をした分の報酬がもらえる。今やり取りしている出版社は小さい会社が多いが理想を持っている。しかし、ただ本を出せば売れるというものではない。だからと言って装丁に漫画なんか死んでも使いたくない。

「俺も自分企画で出したい本がある」

これに手をだしてしまったらジリ貧は覚悟しなくてはならない。いわば禁煙を失敗してチェーンスモーカーに戻ってしまう瀬戸際、結界といってもいいだろう。

「浅野さんがずっとやりたいって言ってたアレですよ。資金繰りとか考えがあるんですか？」

矢口が身を乗り出してきた。

「ないね」

俺は盃に入った酒をくいつと飲んで上を向いた。

いや、あるにはあった。

俺がこれからやりたいのはマイノリティを題材にした写真家の写真集を作ることだった。国内外問わず、そのコミュニティに入り込み信頼関係を築いたうえで長期に取材されたもの。なぜその写真家がそこを取材しようとしたのかテキストも本人の手で書かれたものでなくてはならない。

写真集は一〇〇〇部作ればいいほうで、逆に部数が少ないほど写真集の価値が上がるようになっていく。表紙デザインは頼むとしても版下作りを自分でやれば、印刷代は一〇〇万円程度でできる。一冊五〇〇〇円で売れば十分利益はでるし、次の本の製作費も賄える。流通に関しては、写真集をだしているレーベルの名前を使えばいい。軒先を借りるようなものだ。

矢口は何か感じとったのか、別れ際に、

「浅野さん、企画出版が走りだしたら誘ってくれませんか？ 僕、一緒に仕事したいっす」

と真っ赤になった顔をして抱きついてきた。



新人のときからいっぱしの編集人になるまで俺の下で働いていたので矢口には愛着はある。が、矢口を雇うということは養う人間がひとり増えるということにはほかならない。

「俺がそんなタマかよ」

ひとりフラフラと駅までの道を歩きながら、言葉が口をついて出た。

一〇月も半ば過ぎたというのに気温は二十五℃を下らない。俺はまだ半袖のTシャツを着ている。八月から立て続けに急ぎの仕事や大きな企画をやり遂げたので「寝ない、食べない」の生活が続いていた。一時、体重が五キロ減ったが三キロ戻った。これくらいが一番動きやすいので維持しようと思う。

女房はこの秋に役職がひとつ上がったらしく、俺からみても活き活きとしてみえる。泊まりがけの出張や会食も増えたため、いよいよ俺が料理をするようになった。最初に作ったのは、味噌田楽おでんだった。作り方は簡単でおでんの材料を茹でて、田楽味噌をつけて食べる。それが息子の好物になってしまい、学校から帰ると自分でこんにくを湯がいて田楽味噌をつけ、食べながら宿題をしている。そういうえば、スナック菓子など欲しがらない子どもだったと今更思う。

夕方、娘がオムライスを食べたいと言ってきた。以前、俺がYouTubeを観ながら作ったオムライスが美味しかったようで、いつもの攻撃的な態度を潜めてはちよくちよく頼んでくる。今日は野菜炒めを作る準備をしていると言ってもきかないので、背中をマッサージしてくれたら作ってやると言った。

首や肩を娘の小さな手が動いていく。肩が凝りすぎているのか娘の指が全然入ってこない。娘もそれに苛立つてきたのだろう、

「楽しいことはやるけど、楽しくないことはやりたくない！」と、いきなり叫んでやめてしまった。

楽しくないことはやりたくない！ 楽しくないことはやりたくない！ 楽しくないことはやりたくない！ そうだ、それでいい。

俺はソファから立ち上がり、夕食を作る前に洗濯物をとり込もうと、ベランダに出た。水槽は再びベランダの隅に置かれている。今年のおたまじゃくしはカエルになってからも生きながらえた。おれが昼間にかつお節を与えていたからだ。逆にカエルが多すぎて小さな水槽の中がカオスになった。女房がそれを気持ち悪がったので子どもたちが河川敷にカエルを放しにいった。

洗濯物を抱えてリビングに戻ると、娘が俺のスマホを操作してオムライス作りのYouTubeを観ながら卵を割ってほぐしている。横で息子が玉ねぎを刻んでいるが、これはおそらく命令されたのだろう。

「ねえ、あれ取って」と娘が指を指す。

真鍮製のスタンド灰皿がリビングの隅に置かれている。俺はそこまで歩いて行き、娘の方をみる。

「そこにある髪留め持ってきて」と言う。

ベランダから室内に移動したスタンド灰皿は小物を置く調度品として再利用されている。水槽をベランダに戻すとき、娘が部屋に持って入ったのだ。

スタンド灰皿が部屋に入ってから、なんか調子がいい。写真家が十年かけて撮ったある村の写真集を出すことができたし、おまけにその写真集が賞まで獲ったのだ。

俺はスタンド灰皿の上に手を置いた。できればあと、一冊、欲を言えば何冊か。この写真集のように納得のいく仕事がしたいなと思った。

「何笑ってんの？」と息子が俺に向かって言う。

はっとして、顔を撫ぜた。

「ねえ、髪留め、早く」と娘が跳ねている。